

嘆願と死と乙女 — 「ダナイデス」三部作における『ヒケティデス』

吉 武 純 夫

I

はじめに

アイスキュロス『ヒケティデス』の最大の特徴は、ダナイデスによる2回の長大な嘆願シーンがあることと、これらの嘆願シーンに各1回、そして別にもう1回と計3回も彼女たちが自殺の意向を示していることである。このことは何を表しているのか、ということはまだほとんど論じられていない。いっぽう、「ダナイデス」三部作の第二・三作は失われており、わずかな断片しか残っていない。断片と伝承をより所として復元が試みられてはいるが、確実にわかることはわずかしかない。しかも『ヒケティデス』のテキストは毀れが多い。三部作の元の形を復元するとなると、絶望的である。しかし「ダナイデス」三部作全体のメッセージはある程度推定できる。その全体像の中に現存する『ヒケティデス』をとらえてみるという試みは有益であろう⁽¹⁾。

本論は『ヒケティデス』の中でも特にダナイデスが行う2度の嘆願、そして2度の嘆願の中で共通して行われる、自殺をほのめかした脅迫行為、更に脅迫的嘆願とは離れたコンテクストで表出されるダナイデスの死欲求に着目する。そして、そこに表されたダナイデス像が、三部作の展開において大きな意味を持っていたらうと言うことを示そうとするものである⁽²⁾。

II

「ダナイデス」三部作

まず「ダナイデス」三部作がどんなものであったかについて、どれだけのことがどれだけの確実性をもって知られうるかを考察してみよう。そもそも、ダナイデスの伝説には様々の異なるヴァージョンがあるが、アイスキュロスがこの三部作の第二・三作において採用したのはどんなストーリーであったのだろうか。すべてのヴァージョンに共通であるか、少なくともどのヴァージョンとも矛盾しないという理由からアイスキュロスも使用したに違いないと判断でき

るストーリーは、「ダナオスの50人の娘たちが、父親から夫殺しの指示を受けてアイギュプトスの50人の息子たちと結婚する」ということと、「49人の娘たちが新婚の初夜に夫を殺すが、ヒュペルメストラだけは夫リュンケウスを殺さない」ということくらいしかない⁽³⁾。

ではこの三部作は何を問題としたものであったのか。Garvie(211-12)は、三部作の主題についての12もの説をあげている。その中でThompson, Mazzon, G. Murrayの説が結婚という制度の確立およびそれに付随した社会の変革をこの三部作の中心問題としている⁽⁴⁾。結婚という問題に対してこの三部作がいかなる答えを与えているかという点については、各研究者の異論があるにしても、私はこれらの研究者が問題のありかとして見定めた場所は正しいと考える。つまり、この三部作では男性と女性の関係の問題に解決を与えるものとしての結婚が小さからぬ比重を持って描かれていたと考える。

その根拠としてあげられるのはFr. 44Rである。『ヒケティデス』のヒュポテシスをなすP. Oxy. 2256. 3の記事および、アテナイオス13. 600A の記事によれば、Fr. 44Rは「ダナイデス」三部作の第三作の中に含まれていた断片である^(1A)。

*ΑΦΡΟΔΙΤΗ· ἐρᾷ μὲν ἄγνος οὐρανὸς τρωῶσαι χθόνα,
ἔρωσ δὲ γαῖαν λαμβάνει γάμου τυχεῖν·
ὄμβρος δ' ἀπ' εὐνάεντος οὐρανοῦ πεσὼν
* ἔκνυε γαῖαν· ἢ δὲ τίκτεται βροτοῖς
μήλων τε βοσκὰς καὶ βίον Δημήτριον
δένδρων τ' ὀπώραν· ἐκ νοτίζοντος γάμου
τελειῶν δ' ἔστι· τῶν δ' ἐγὼ παραίτιος*

これは、相手を傷つけようとして男性（ウラノス）が近づいたとき、エロスが女性（ガイア）をしてそれをむしろ快く受け入れさせる。そして結婚が成立し、実りが生ずる。これをなしとげるのは神である。という内容の神話である。

古典期アテナイの場合を考えるならば、結婚は、少なくとも家族以外の男性から厳しく隔離されて生活してきた処女が、15-16才ほどの年齢で、親が決めた15才も年上の面識も乏しい男性と結婚させられるというのが普通だった⁽⁵⁾。そのような結婚（ガモス）は、そして初めての性的接触は、いかに周囲から祝福されたとしても、結婚をひかえた処女にとって、恐れと不安を伴うものであったと考えられる⁽⁶⁾。Fr. 44R は、そのような処女にガモスがいかによきものであるかを教えることを意図した言葉でありえただろう。

この三部作のコンテクストに戻って考えると、1行目の暴力的な求婚は『ヒケティデス』でダナイデスがアイギュプティオイに対して描いていたイメージと一致する⁽⁷⁾。アイギュプティオイが暴力的に求めた結婚は『ヒケティデス』の中で嫌悪され、第二・三作に至って夫殺しという決定的な形で拒絶される。しかし、『ヒケティデス』のエクソドスの第二コロスに帰されるセリフは、アフロディテが欲望 (Πόθος) と説得 (Πείθω) とともにはたらくものであると歌う。(1038-40)

μετάκοινοι δὲ φίλαι ματρὶ πάρειςιν
Πόθος δὲ τ' οὐδὲν ἄπαρνον
τελέθει θέλκτορι Πειθοῖ·

1040

しかもそれは、暴力 (βία) が説得 (πειθω) の反対概念であることをペラスゴスのセリフ(940-44)が示してまもなくのことである⁽⁸⁾。このことを踏まえると、Fr. 44Rは、アフロディテが司るガモスとは、暴力的なものと無縁ではないが、それとは全く違った働きによって行われるものであり、納得の上で成立しうるものであるということを示したものであると言えよう⁽⁹⁾。したがって、この断片はアフロディテが神としての権威をもってヒュペルメストラの結婚を正当化したものでもありうるし、また49人の姉妹に結婚への忌避を解除するために、ガモスが是認すべきもの受け入れるべきものであることを教え諭したセリフでもありうることになる⁽¹⁰⁾。ここで50人または49人の集合体をなすダナイデスとは、ガモスに恐れと不安を抱くすべての処女の象徴である、と考えることができる⁽¹¹⁾。

アイスキュロスが三部作という壮大な形式によって、人間社会の尊厳にかかわるような普遍的な善を描いたということは、「オレスティア」三部作の例からも類推することができる⁽¹²⁾。しかも458BC に上演された「オレスティア」三部作と463BC に上演された「ダナイデス」三部作の間には、非常に多くの共通点が指摘されている⁽¹³⁾。「オレスティア」三部作が描いたのは復讐連鎖の終結という人類の進歩であったわけだが、「ダナイデス」三部作が描いたのもこのような人類の進歩であつたのではないだろうか。上の議論から推定されるその進歩とは、男性が暴力的に女性に迫り、女性もまた手荒な方法でそれを拒絶するというような野蛮な男女関係から人類が脱却して、男女が合意の上で結婚し性的関係を結ぶようになったという、太古における人類の進歩のことである。しかし、それはまた、いつの時代にも子供が大人に成長する過程で学ぶ／

学ばなくてはならない大人の分別でもある⁽¹⁴⁾。

では、このような三部作の中で第一作『ヒケティデス』はどのような機能を果たしているだろうか。このことを考察した研究は多くはないように見受けられる⁽¹⁵⁾。もちろん『ヒケティデス』においてダナイデスがアルゴス人に庇護を求めて受け入れられることが、やがてアルゴス人とエジプト人の間に起こる戦争を動機づけるということは、だれの目にも明白である⁽¹⁶⁾。しかしそこにとどまらず、その庇護の求め方の特徴を明らかにして三部作の中に位置づけること、あるいは、『ヒケティデス』においてダナイデスが繰り返す嘆願と、繰り返す自殺の意向を分析して三部作の中に位置づけてみることは無益ではないであろう。

III

ダナイデスの嘆願

(i) ペラスゴスへの嘆願について問うべきこと

いとこアイギュプティオイの追跡を逃れてきたダナイデスは、アルゴス王ペラスゴスに嘆願をして庇護を求め(234-506)、その了承を取りつける(480-523)⁽¹⁷⁾。しかしペラスゴスはこの求めを快諾したわけではない。アルゴスにとってみればダナイデスを庇護することはアイギュプティオイとの戦争を招きかねないので、ペラスゴスは熟慮した上で(407-17)、いったんはこの嘆願を拒絶する(438-55)。それに対してダナイデスはもし嘆願が拒絶されるなら神像の側で首吊り自殺をして神域を汚し、ペラスゴスを困らせてやると脅す(455-65)。するとペラスゴスは更に苦しいディレンマに立たされて、まもなく彼女らを庇護する態度を表明するに至る。

彼女らを庇護することはできないと政治的判断を下したペラスゴスが要求を受け入れることになるのは、彼女らが自殺予告をして受諾を迫るからに他ならない。ここで直ちに疑問が起こる。ペラスゴスが嘆願者である彼女らの要求をいったん拒絶したことは許されぬことだったのだろうか。嘆願者として要求を押し通そうとする彼女らは正しいだろうか。ペラスゴスが最後に要求を受け入れなくてはならなくなるのは必然的なことだったのだろうか。この問題は今まで正面から論じられたことはなかったように見受けられる。ダナイデスの要求の正当性を論じようとした研究は、もっぱら彼女らの結婚忌避の正当性の問題

に関心を向けがちであったし、ペラスゴスのディレンマについての考察も、アイスキュロスの性格描写の問題とアルゴスの政治体制の問題が中心にされてきたからである。しかし嘆願という慣習の側面からも考察してみることは重要である。そしてそこから、この章では嘆願シーンが何を描き出そうとしたものなのかを探る。

(ii) 嘆願という慣習

この問題を考察してみるためには、まず嘆願という慣習(*ikhteia*, supplication) についての知識を整理し、それをこの作品のコンテクストに即して再検討してみなくてはならない。言うまでもなく、慣習としての嘆願とは、相手とする人間や祭壇などの前で特定の儀礼的行為を行って保護や援助を要求すれば、その要求を通してもらう権利が神により保証されるというものである⁽¹⁸⁾。そして嘆願は、まずその儀礼的行為の別により、

α. 人間の膝・顎・右手にすがることによって成立する嘆願⁽¹⁹⁾

β. 祭壇・神域などに接触を持つことによって成立する嘆願

の2種類に分けられる。βタイプの嘆願においては、神聖なものに接触した嘆願者自体が聖なるものの性格を帯び、不可侵となるのである⁽²⁰⁾。そして『ヒケティデス』においてはもっぱらβタイプのみが演ぜられる。嘆願者が要求する最も基本的なものは「嘆願している最中の本人の身の安全」であるが、どういう要求を誰に対して行うかには様々なヴァリエーションがある。そこで要求の内容によって、

A. 直接敵に向かって「私に危害を加えないでください」と要求する嘆願

B. 第三者に向かって「私を敵から守ってください」あるいは「私に力を貸してください」と要求する嘆願

C. 人間ではなく神像・祭壇・神域等に向かって（すなわちβタイプに限られる）「私の身を不可侵の者にしてください」と要求する嘆願

の3種類にも大別される⁽²¹⁾。（嘆願される人間にとって）Aの嘆願を受け入れることは、相手に危害を加えることを中止するだけのことであるから、その意思さえあれば誰にでもできることである。従ってAの嘆願を拒絶することは、少なくともβタイプの形式を取っている限りは、神聖なものに対する純粋な不敬を意味し、それは神罰の対象となる行為として憚られたということは容易に理解できる⁽²²⁾。しかしBの嘆願を受け入れることは、いつでも誰にでもでき

ることではない⁽²³⁾。

(iii) 要求を拒絶する権利

ここで、先ほどの疑問を問い直してみよう。ダナイデスのペラスゴスに対する嘆願はβタイプの形式をとり、Bの要求内容をもった嘆願であるが、このタイプの嘆願を拒絶することは、その要求内容が嘆願される側の対応能力を越えている場合でも、許されないことだったのだろうか。

Mikalson(1991), 72 は、嘆願された者が嘆願者のいかなる要求をも受け入れなくてはならなかったとするような証拠は存在しないし、もし不当な要求をも受け入れねばならなかったとすると社会的・法的な混乱が起こっただろうと述べている。またParker, 181も、(βタイプの形式をとるすべての)嘆願者が絶対的に得ることができたといえる権利は、「嘆願の相手(βの場合でも保護を求める相手であって、敵ではない)によって害されない」ということまでで、それ以上の要求を聞き入れてもらえる保証は「恐らく絶対的なものではなかったろう」と述べている。ただし要求が理にかなったものであれば、保証も大きかったと付け加えている。不当な要求を伴った嘆願の例として、犯罪者が嘆願する場合が考えられるが、嘆願をする権利は犯罪者にも保証されていた。しかしそれは、Sinn, 91 によると、一時的な保護を与えて公正な訴訟を進めるための措置であったとし、嘆願をしたからといって刑罰を免れることはできなかったという。このことは、嘆願が不当な要求をもかなえるものではなかったことを示唆する。

ただしMikalson(1991), 72 は、ギリシア悲劇においては保護を求める嘆願者が差し出す要求は正当な要求であることが慣例であったと付け加えている。しかしダナイデスは、自分たちが最初に出した庇護の要求自体が正当なものであることを証明しようとしないう。ペラスゴスが彼女らにその立場の正当性を正義、掟の面から2度(336;389-91)質問すると、彼女らはむしろその議論を避けて通ろうとする。つまりアイスキュロスは、ダナイデスをあえて例外的に、正当性のあいまいな要求を差し出す嘆願者として描いているのである。このことは、手にあまる彼女らの要求を受け入れる義務はペラスゴスにはないかもしれないという可能性を、少なくとも観衆に示唆する⁽²⁴⁾。

また、この作品においてダナイデスが、嘆願を有利にするための方策として「ゼウスの怒り」の議論だけでなく「アルゴスの民との類縁関係」および「ア

イギプティオイの不正」の議論をも持ち出しているという事実や、他の、嘆願シーンを含むいくつかのギリシア悲劇においても、嘆願者が要求を申し述べる時、あるいは相手がそれを受け入れる理由を述べるときに神の強制力以外の様々な根拠を語るという事実がある⁽²⁵⁾。この事実は、嘆願の儀礼を行いさえすれば正当な対処法がただ一通りに決まるのではなくて、どのような対処法が正当となるかは様々な要素と議論の力学によって決定するものであるということを示唆する。

いずれにせよペラスゴスは（そして観衆も）、ダナイデスの要求がどれだけ正当なのかを判断できぬままで受入れ問題を考えなくてはならなかった。その結果として、彼は嘆願を拒絶する意向を発表するのであるが、もしまだ彼にためらいが残っていたとしたら、彼にはもう一つとりうる方策があったと考えられる。Sinn, 92 は好ましくない嘆願者を追い出すための方法として、神託を伺いそれを恣意的に解釈して嘆願を拒絶するのに援用するという方法が実際に用いられていたと報告している⁽²⁶⁾。ペラスゴスは神託を曲解してまでダナイデスを拒絶するつもりはなかったとしても、この方法によって問題を一時保留にすることはできたであろう。しかしそのような方策を取らずに拒絶することを決心したということは、この時点では彼のディレンマはそれほど大きなものではなかったということを示唆する。以上のいくつかの議論から、ペラスゴスがダナイデスの要求を拒絶する自由はあったと考えてよいと結論される。

(iv) ダナイデスの攻撃性

ところがダナイデスたちはペラスゴスのこの最初の決定(438-55)を不服として、もし要求を受け入れてもらえなければ首吊り自殺をするという。これによってペラスゴスは彼女らの要求を拒絶する自由を奪われてしまう。なぜならば、もし自殺をされたら、その自殺がいかに不当な行為であろうとも⁽²⁷⁾、結局はペラスゴスの管轄内の祭壇が汚れるのであり、ペラスゴスもその罪を問われるはずだからである⁽²⁸⁾。彼女らのこのようなやり方がまかり通るならば、嘆願者はどんな要求でもかなえることができることになり、Mikalsonも指摘したように、社会秩序は混乱に陥ってしまうだろう。このような嘆願の仕方にはなんらかの歯止めが存在したはずである。彼女らの取ったこの戦略の妥当性を検討してみよう。

最初に問うべきことは、彼女らにとっては、自殺脅迫をする前に、もっと穏

やかなとるべき道はなかったのかということである。エウリピデスの『ヒケティデス』の場合、アルゴスの七将の老母たち（コロス）は、息子たちの遺骸を敵から取り返してもらうという嘆願要求をデメテルの神殿の前でテセウスに拒絶される。すると、嘆願の指揮をとっていたアルゴス王アドラストスは嘆願を断念しようとするが、彼女たちはなお諦めずテセウスの膝元にすがりついて嘆願の言葉を続ける。しかしこのとき言葉での脅迫はなく、しぐさも言葉も低姿勢のままで⁽²⁹⁾、それ以上の行動には進まない⁽³⁰⁾。この嘆願を受けた時からテセウスには心が変わる兆しが現れ、アイトラの助言もあって結局この嘆願を受け入れることになる。彼女たちは上述のβタイプの嘆願が失敗に終わったらαタイプの嘆願をも試みて成功にこぎつけるのである。このことは、αタイプの嘆願は古典期には現実的にはもう行われなくなっていたにしても、エウリピデスが神話の世界においてはαタイプがβタイプよりもお効果的な方法でありうると考えていたことを示す⁽³¹⁾。アイスキュロスも、この劇の中でαタイプの嘆願を演じさせても支障はなかったはずである。しかしダナイデスには、この選択肢を試みることをさせず、通常では嘆願者がとらない自殺脅迫という最後の手段をとらせたのである。

しかし、自分の死を予告して脅迫的な嘆願をする例は他にもないわけではない。ヘロドトス7.141では、デルポイで好ましくない神託を告げられたアテナイの託宣使が、嘆願者となって再度神託を乞い、「もっとよいお告げを告げてくださらなければ、私たちは生命を終わるまでこの場に留まるでしょう」と語る（482年頃）。エウリピデス『タウリスのイフィゲネイア』973-75では、オレステスがデルポイの神殿でアポロンに向かって「もし私を救ってくださらなければ、私はこの場で絶食して死ぬつもりです」と語る。エウリピデス『イオン』1309-11では、祭壇で嘆願の座についたクレウサが、イオンに追跡をやめてもらうために彼に言うのは「神聖な社の中で私と殺してごらんください」という意味の要求である。自分で死ぬ意思を持って死ぬことが自殺であるとすれば、自殺は、自分で自分を直接殺すという「積極的な」場合と、自分の死を他のものに委ねるといふ「消極的な」場合の2種類に分けられる。縊死は前者であるし、断食や神や運命に自分の死を求めることなどは後者に属することになる⁽³²⁾。このことを前提として考えると、いまあげた他の例はいずれも「消極的な自殺」である。

もう一つ著名な例は、エウリピデス『ヘレネ』におけるメネラオスである。彼は982-87では明らかに、嘆願場所である墓所における積極的自殺の意図を語

り、テオノエがヘレネを解放するようにと要求する。しかしその前後のセリフに目を向けると、彼にはまずテオノエの兄との決闘を第一に望むという堂々たる覚悟(978-79)があり、それがかなえられぬときに餓死をしないための(つまり自分の名誉のための)次善策として自殺を語っているのであるし、993では「殺してくれ」という迫り方をしているのである⁽³³⁾。以上の例ではいずれも、自分の死を予告する脅迫の中にもどこか遠慮・慎みのしるしが見てとれる⁽³⁴⁾。しかるにダナイデスは遠慮なく首吊りという明らかに「積極的な自殺」を予告して脅迫するのである。文献上に現れる脅迫的な嘆願にはこれほど攻撃的なものは他にない⁽³⁵⁾⁽³⁶⁾。

(v) ダナイデスの自己中心主義

ところで、ペラスゴスが嘆願を拒絶する意向を示したのは、ゼウス(ヒケシオス)の怒りの恐ろしさをふまえて迷った上でも(413-17)やはり、彼としてはその状況のままでは受入れが無理だったからである。彼がダナイデスの要求を「掟」の観点から2度も質問したのは(336, 387-91)、彼女らの主張の正当性を確認した上でなくては安易に彼女らを受け入れるべきではなかったからである。もし彼女らを受け入れたらエジプトと敵対させられる可能性がある以上、彼はアルゴス国王として自分たちの正義を主張するためにも、彼女らに立場の正当性を明らかにしてもらった必要があった。しかしその時、彼女らはどんな受け答えをしていたらうか。ダナイデスが「アイギュプトスの一族に仕える身になりたくない」(335)と言ったのを受けて、「憎しみゆえか、それとも掟にふれるゆえか」(336)とペラスゴスがダナイデスに訪ねると、彼女らはその答えを言わず、逆に、

Χο. τίς δ' ἂν φίλους ὄνοιτο τοὺς κεκτημένους; 337

「どんな女が親類の男たちを φίλους として非難するのでしょうか⁽³⁷⁾。」という反問を返す。ここの部分はテキストに毀れがあると見られ、確実な解釈をすることは難しい。テキストの異同にあまりこだわらず共通してできる解釈にとどめることにすれば、私たちに判断しうることは、この一行によってダナイデスはペラスゴスの問いをはぐらかしてしまったということである。その直後に続く議論は、ダナイデスがなぜ結婚したくないかではなく、親類内の結婚というものの長所は何か短所は何かという問題にすり変わってしまうのである

ゴスは彼女らを恨まない。しかし、かように自己中心主義でわがまま勝手な振る舞いをするダナイデスは、観衆にはそれとは違う倫理的評価を持たせるであろう。

(vi) ゼウスへの嘆願

ダナイデスは、ペラスゴスへの嘆願のほかに、パロドス(1-175)でゼウスにも嘆願をしている。パロドスの大体の構成は次のようになっている。

- ①この嘆願の概要を提示(1-39),
- ②イオと自分たちの惨状の近似性を示す(40-76),
- ③ゼウスに「正しい判断」を要望(77-90),
- ④ゼウスの権能を賞賛する(91-103),
- ⑤自分たちの窮状の訴え(104-33),
- ⑥ゼウスへの個人的要望を述べる(134-53),
- ⑦ゼウスを脅す(154-75).

パロドス全体を占めるこの嘆願は、パロドスらしくこの物語の設定を提示する機能を見せている。つまり、ダナイデスがどういう窮状に立たされ、どういう思いを持っており、どういう姿勢で何を欲しているのかということが示されている。ではこの嘆願においてはどのようなダナイデス像が描かれているだろうか。

③と④は正義の絶対的擁護者という、ヘシオドス的でオーソドクスなゼウス像の信仰表明であると言うことができよう。ただし、③は同時にゼウス（およびその他の神々）に対する彼女らの不信感をも露呈している。

ἀλλὰ θεοὶ γενέται κλύετ' εὖ τὸ δίκαιον ἰδόντες [ἀντ. γ
†ῆβαι μὴ τέλεον† δόντες ἔχειν παρ' αἴσαν, 80
ὑβριν δ' ἐτύμως στυγοῦντες
πέλοιτ' ἂν ἔνδικοι γάμοις.
ἔστιν κακὸν πολέμου τειρομένοις
βωμὸς ἀρῆς φυγᾶσιν
ῥῦμα, δαιμόνων σέβας. 85

εἴθ' εἴη 'κ Διὸς εὖ παναληθῶς [στρ. δ
Διὸς ἴμερος οὐκ εὐθήρατος ἐτύχθη

77-80 は、神々が正義を見落とすこともありうるということを前提とした言い方である。また、86はゼウスの判断がよきものとされるのはうわべだけのことであるかもしれないという疑いを前提としたものである。87-90 はゼウスの意向はよくわからないものだということを示している。「ゼウスの意向ははかり知れない」というトポスは、通常は決して「ゼウスの正義」に対する信頼と矛盾するものではない。しかしここでは直前の一節により、不信感を補足・助長するものとなっている。そして③全体は、彼女らの不信感に加えて、ゼウスにそのあり方を指図する彼女らの高慢さを表したものとなっている。

この嘆願も、要求を聞き入れられない場合の自殺予告という脅迫を⑦に含んでいる。第1エペイソディオンでペラスゴスに向けて発せられる脅迫が描き出すダナイデス像と共通する部分もあるが、ここでは特に、神に向けられた脅迫であるということに着目して考察してみよう。

彼女らが予告の通りに自殺すれば、二重の意味でゼウスへの加害あるいは不敬となる。つまり一方において祭壇を死によって汚すということ⁽⁴⁵⁾、他方においてハデスに嘆願をし(156-60)、ゼウスの「裏切り」に対する非難を喚起する(168-72)ということである。この種の非難が神にとっても恐ろしいものであることは、アイスキュロス『エウメニデス』232-34に語られている⁽⁴⁶⁾。祭壇を汚すということは、ペラスゴスへの脅迫においては間接的な攻撃を意味したのに対して、この場合は嘆願相手であるゼウスを直接に攻撃することを意味する。しかもこの場合も自殺の方法は首吊りであるから、彼女らのこの攻撃も「積極的」である⁽⁴⁷⁾。

ただし彼女らが行ったのはあくまでも自殺を語った脅迫であって、自殺を実行したわけではない。であれば、彼女らの自殺の脅しは神への加害とはみなされないのではないかという疑問もありえよう⁽⁴⁸⁾。この問題は、自殺という領域に特定せず、神に対する侵害意図または「神に対する試み」の問題として考えることができる。ヘロドトス6.86は、「神を試みにかけること(τὸ πειρηθῆναι τοῦ θεοῦ)」と「実行すること」は同罪であるという巫女の言葉を伝えている⁽⁴⁹⁾。そこで問題となっている行為は、アポロン神が(神託を通じて)不正に加担することがあるかどうかを試してみるということであるが、「神を試みにかけること」という言葉に引っくられるめられているのは、神の意向

を疑う、神の意向に反するようなことを言って神の出方を見てみるということである。この点では、ダナイデスの脅迫行為も同類であると考えられる。何故ならば、彼女らはまず神が自分たちに味方してくれないかもしれないという恐れを抱いており、もしそうならば策略によって神の心を動かそうとしているのである。つまり彼女らは神の意向に疑いを持っているのであり、神の意向を曲げることもできると考えており、必要ならばそれをやってみようと思図しているからである。このことから、彼女らの自殺の脅しはやはり、神に対する大きな加害であったと判断される。

彼女らの神に対する不信感には先に2度述べたが、もう一つの側面からも検討する必要がある。第1エペイソディオンで行われる嘆願は相手ペラスゴスを目前において行う嘆願であるが、それとは対照的に、パロドスにおける嘆願は、相手なるゼウスが見えないまま行われる嘆願である。彼女らは祭壇に話しかけているのだとも言えようが、ゼウスおよびその他の神々に、意向を伝える意志を持って語りかけているのかということが問題となる⁽⁵⁰⁾。むろん劇中の人物であるから、彼女らの内なる意志というものは存在しない。それはそれでよいのだが、論理的に整理してみよう。もし彼女らが自分たちの声は神に届いていないのだとたかをくくってあのようなことを言っていたとすれば、彼女らの不敬の罪は減じて見積られる余地があるだろう。しかしそのかわり、彼女らの神に対する不信感は大いなものだということになる。他方もし脅迫も含めてすべてが神に聞こえていると考えているならば、彼女らの神に対する攻撃性は額面通りのものとなる。どちらが真実なのかと問うたとしても答えは存在しないが、どちらの場合でも彼女らの神に対する不敬度さが見て取られることになるのである。

最後に、リフレインの部分(ephymnium post 175 =162-66)⁽⁵¹⁾を除いて考えると、この嘆願そしてパロドスを締めくくっているのは彼女らの脅迫の言葉であるという事実も重要である。パロドスが終わると彼女らの父ダナオスが口を開いて、慎み深く嘆願せよという主旨の指示をする(176-203)⁽⁵²⁾。このコントラストが強調して観衆に教えるのは、ダナイデスがいかに不敬・不信仰である／になりうるかということである⁽⁵³⁾。

(vii) 嘆願シーンからの結論

ダナオスは、嘆願者というものは、他国から逃げてきた寄る辺のない弱い立

場の者にふさわしく慎み深く、尊大でなく、差し出がましくなく横柄でない口のききかたをしなくてはならない(194-203)として、嘆願の礼儀を娘たちに諭し、娘たちは「この忠告を決して忘れません(205)」と答える。しかし彼女らがこの劇の中で実際に行うことは、ダナオスが勧告した振る舞いとは似ても似つかぬものである。2つの嘆願シーンにおけるダナイデスの攻撃的、自己中心的、不敬、不信仰な振る舞いは、ダナオスが指示した行動ではなくて、娘たちがそれから勝手に逸脱して取った行動なのである。

IV

ダナイデスの死欲求とそれに代わるもの

(i) 第三スタシモンへの注目

『ヒケティデス』を特徴づけるもう一つの箇所は、ダナイデスが死欲求を歌い踊る、第三スタシモン(776-824)の前半部分である。自殺意向の告白としては劇内でこれが3度目であるうえ、31行にもわたる歌舞として表されている点はギリシア悲劇の中でもひととき目を引くものである。この章ではこの箇所に表された彼女らの死欲求と、その周辺の経過を検討して、そこから得られるダナイデス像を探ることにする。

ダナイデスは第三スタシモンの最初の各4連($\alpha, \alpha', \beta, \beta'$)で4回死欲求を歌う。しかし彼女らは後になっても自殺しないし、そのそぶりも見せない。では彼女らがここで表現しているものは何なのであろうか。第三スタシモンにおいて表明される死欲求の性格は、それまでに2度の嘆願で表明された自殺意向の性格とは大きく違っている。すなわち、先の2例はゼウス、ペラスゴスという相手があって語られていたもので、脅迫であったが、これに対して第三スタシモンは相手なしの独言として歌われるものである⁽⁵⁴⁾。従って、第三スタシモンでは、彼女らが意に反するようなことを策略的に語るということはないであろうし、もし思いを語ることがあるとすれば、誇張して表現することはありうるとしても、それは自分の思いまたは自分の置かれた状況を率直に表したものだとも考えてもよいであろう⁽⁵⁵⁾。

第三スタシモンのテキストを分析する前にそこに至るまでの経過を見ておこう。第一エペイソディオンでペラスゴスがダナイデスの庇護を引き受けることに一応同意すると、彼とダナオスは彼女たちを残してアルゴス市民の民会へお

もむき、この庇護に対する民会の承認をも取りつける。短い第二エペイソディオン(600-29)でアルゴス市民がいかに積極的に庇護を約束してくれたかが語られると、彼女たちは第二スタシモン(630-709)で神にアルゴスの繁栄を祈ることによってこの国への感謝を歌う。その歌が終わるやいなや、ダナオスはアイギュプティオイの船が沖に見えてきたと報告して、第三エペイソディオン(710-75)が始まる。彼女たちはひどい恐怖と不安に襲われ、すぐにダナオスとダナイデスのコンモス(736-63)となるが、ダナオスは娘らに恐ろしくとも分別を持って神々を忘れぬようにと勧告した上で、市民の援けを呼びに行くために、その場を去る。自分たちだけ残されてダナイデスが歌うのが第三スタシモンである。

(ii) 第三スタシモンの内容分析

第三スタシモンは6連($a, a', \beta, \beta', \gamma, \gamma'$)からなっており、その内容はおよそ次の通りである。

a : 私たちはどこへ逃げたらよいか、身を隠せるのはどこか。煙となって空へ消えたい。(776-83)

a' : 死は避けられないだろう。恐ろしい。首を吊って死にたい、男に触られる前に。(784-791)

β : 空の座所、高い岩山はどこか。結婚の前に深い谷へ身投げをして、誰かにそれを証ししてもらいたい。(792-99)

β' : 犬鳥の餌食となってもよい。結婚の床に入る前に、死よ来てください。逃れる方法はあるだろうか。(800-07)

γ : 神々へ祈り叫べ。ゼウスよ、暴力を注視してください、嘆願者たちを尊重してください。(808-16)

γ' : というのは、奴らが私たちを暴力で捕らえようとしているから。あなたこそ絶対権力を持っている。(817-24)

これをよく見ると、6連の中に彼女らの心理の推移が整合的に表されていることがわかる。極度の不安と恐怖に襲われた彼女らが求めるものは、順に

- ① 跡形なく消え失せてゼウスのそばへゆくこと(a)
- ② くくり縄による死(a'),
- ③ 「険しい岩山(しかも神の座)から谷底への落下」による死(β)
- ④ 犬鳥の餌食になる契機としての死(β')

⑤ゼウスの監視(γ)

⑥ゼウスの裁定(γ')

である。はじめの4項に並べられた死をそれぞれ本人の苦痛と他人の目の観点から考えてみると、次のようにまとめられる。

①非現実的・空想的な無痛の死。だれにも見られない。

②静かな窒息死。派手ではない。

③打撲、裂傷、流血を伴う凄絶な死。だれかに見てもらいたい。

④屍肉が喰いちぎられ、骨が露出される。痛いかどうかはわからないが、見た目に無残である。

この流れの中には次のような過程が見出される。すなわち、ダナイデスは最初、神のそばに逃れて行くことを空想的に気安く望んでいた(①)が、恐ろしい敵のイメージがわいてきて、もっと現実的な死を求めるようになってくる(②)。彼女らは自分たちの災難のひどさを物語るようなすさまじい死に方をして、だれかにその証言をしてもらいたいと願う(③)。彼女らは自分たちの死体がさらにどんなにひどい目に合うかもよく承知しているが、それでもなお敵に捕らえられる禍よりも死をよきものと見て、死を求める(④)。①～③の死欲求は希求法で表されているが、④は命令法を使ってより決然と表されている(ἐλλέτω μόρος 804)。彼女らはより確実な死を求めるようになるとともに、より凄絶な死を求めるようになる。しかしそれとともにここでもう一つのことが明らかになってくる。すなわち彼女らの歌は、自殺を目撃する人はいてもその人は助けられないだろう(⑤)、死体が放置されて野晒しとなるだろう(⑥)ということによって、そういう方法をとる彼女ら自身の惨めさをも次第に描き出すのである。彼女らが①で空に逃れたいと言っていたのは、そこがゼウスの居所に近い(780)からであったと考えられるが、③で行き場として求める「空の座所」(ἀίθερος θρόνος 792)も当然ゼウスの近くを意味する。とすれば、彼女らは頼みとしているゼウスの近くまで行っても、救われることなく投身自殺するのだというシナリオを描いているわけで、この歌は、彼女らがゼウスに取り合ってもらえないかもしれないことをも暗示しているのである⁽⁵⁶⁾。

このように求める死が凄絶なものとなり、また自殺した場合の惨めさも暗示された後で、彼女らの歌は突如方向転換する。すなわち彼女らは、β'の終わりの2行で、(死のほかには)まだどのような救われる道があるだろうと自問し始める。(806-07)

これは反語ともとれるし、率直な疑問ともとれる。しかしいずれにせよ彼女たちは肯定的な答えを見つけるのである。γに入るとすぐ彼女らは神々に加護を求めることを思いつく(808-09)。そして2連にわたってゼウスに監視と裁定を求める呼びかけを続けて、第三スタシモンを終える(810)⁽⁵⁷⁾。注目すべきことは、彼女らがα~β'(=①~④)においては神による救いということは一切口にしていないことと、γ~γ'(=⑤~⑥)においては死欲求を一切語らなくなるということである。ちょうど「死という救い」と「神による救い」とが入れ代わった形になっている。①~⑥の流れは、彼女ら自身で手に入れることのできる救いの限界が死であり、それも結局は惨めなものに他ならないという新しい認識が、彼女らをして神に救いを求めしむる契機となるということを示唆するものである。

(iii) 第三スタシモンの死欲求 — その真意と内実

実際は、後に第四エペイソディオン内のコンモス(843-902)で彼女らがアイギュプティオイの伝令使によって捕まりそうになっても、彼女たちは以前に語っていたように「大急ぎで」(465)「捕まる前に」(790, 798, 804)自殺するような気配は全く見せない。彼女らは死にたいと思うことをやめたように見える。それは上述の理由から、彼女らが第三スタシモンの途中で死に救いを見出せなくなったからだと解することができるかもしれない。しかし、第三スタシモンで彼女らの置かれている状況を考えてみると、そもそも彼女らはその時本当に死を欲求していたのだろうかという疑問を抱かずにはいられない。が起こってくる。つまり、アイギュプティもその使者もまだその場に到着していないという状況である。ダナオスが立ち去る直前にていねいに教えているように、敵の船はまだ遠くに見えてきたばかりであって、暗がりの中でこれから船を停泊させるには時間がかかるはずである(764-72)。また、彼は既に庇護の約束を得たアルゴス市民に救援を求めに出かけたのであって、そのことについては何の支障も予想されていない。たとえ敵の伝令使か *επτοβη*⁽⁵⁸⁾ がやって来るとしても(727-28)、アルゴス市民に救護されることは十分に期待できるわけで(739-40)、要するに彼女らは絶対的な危機に立たされてはいないのである。そんな状況にあるのに、どうして彼女らは死んでしまいたいと言うのであろうか。

まず、死欲求表現の言葉に着目してみよう。4度のうち3度(α', β, β')も、アイギュプティオイに捕らわれる前に」という意味の言葉が添えられている。

α' θέλοιμι δ' ἄν μορσίμου
βρόχου τυχεῖν ἐν ἀρτάναις
πρὶν ἄνδρ' ἀπευκτὸν τῶιδε χριμφθῆναι χροῖ· 790
πρόπαρ θανούσας δ' Αἴδας ἀνάσσει.

β πόθεν δέ μοι γένοιτ' ἄν αἰθέρος θρόνος, 792

.....
γυπιάς πέτρα, βαθὺ 796
πτῶμα μαρτυροῦσά μοι,
πρὶν δαίκτηρος βίαι
καρδίας γάμου κυρῆσαι;

β' ἐλθέτω μόρος πρὸ κοι- 805
τας γαμηλίου τυχών·

このことは、自分たちが敵の手に落ちることが決定的であるかどうかをもはや問題とはせず、「intactな状態で死ぬ」ことを欲しているということを強調するものと解される。ここで明らかになるのはダナイデスが希求しているのは、もはや自分たちが普通の意味での「助かる」ことではないということである。つまり彼女らは、それがかなう可能性はまだ十分にあると見込まれるのに、「intactな状態で助かりたい」という最初の願望を放棄しているのである。このことを裏づけるのは、彼女らは敵の撃退・撃滅を望むということを第四エペイソディオンのコンモスに至るまで行わないという事実である。では「intactな状態で死ぬ」というのはどういうことであろうか。彼女らは恐ろしいことが起こらないうちに、それも起こりそうになる前に、すなわち、まだ自分の身が安全なうちに、死によって別の「絶対的な安全」を確保したいのである。少なくとも彼女らは言葉の上ではそういつていることになる。もしこのまま彼女らが自殺したとしたら、彼女らは著しく命を安直に手放す者と見られ、野蛮な者と見られたであろう⁽⁵⁹⁾。また、このことを言い換えると、彼女らが死によって逃れたいとしているのは「捕らえられること」からよりもむしろ「捕らえら

れることの可能性」からなのであり、そこに生ずる不安と恐怖からなのであるということもできる。つまり、彼女らは少しでも不安・恐怖があるとじっとしてはいられなくなる不安症・恐怖症患者あるいは、単にわがまま（忍耐力がなく、すぐ不平を言うという意味での）な者たちとみなすことができるであろう。以上のことが、彼女らの死欲求の言葉が示している額面通りの意味である。ただし、それをどれだけ本気で言っているのかは誰にもわからない。

今度は彼女らの死欲求を表現した最初の箇所を見てみよう。

α μέλας γενοίμαν καπνὸς
 νέφεσσι γειτονῶν Διός, 780
 τὸ πᾶν δ' ἄφαντος ἀμπετῆς ἄϊστος ὡς
 κόνις ἄτερθε πτερύγων ὀλοίμαν.

ここで、ゼウスのそばへ行きたいというのは空想的な願望であるし、滅びて消えたいということも実現は難しい理想である。そしてこの死欲求は肉体的苦痛、名誉、社会的波紋という現実的問題とは一切関わりなく語られているため、死を手段としない漠然とした逃避願望と大差ない。確固とした死の選択というものは感じられない。このことは、彼女らの死欲求の出発点があまり本気なものではなかったと解釈する余地のあることを観衆に示すものである。

彼女らの置かれた状況を考えるならば、さらに一步進めて、彼女らがめざしているのは死ではないはずだという推論もありうるだろう。確かに状況はまだ差し迫った危機というほどのものではないが、しかし彼女らが大きな不安と恐怖に襲われているということも否めない(738, 786)。もしある人が、実際に起きる可能性は低いと見られる災難に対して不安と恐怖を抱き、それゆえに死にたいと言ったとしたら、その人は、不安症・恐怖症患者でもない限りは、死欲求によって不安と恐怖の困惑状態を比喩的に表現しているだけだと解するのが普通であろう。ダナイデスの場合でも同様に考えてみるができる。彼女らが第三スタシモンで死欲求を語るということは、死という逃避先の選択を表現したものでなくて、不安と恐怖の困惑状態を表現したものに過ぎないと解することもできるだろう⁽⁶⁰⁾。その場合、いかなる死を求めるかの表現は、自分の困惑状態の程度を表すためのヴァリエーションに過ぎないものとなる。ダナイデスの場合で言えば、アイギュプティオイに対する被害意識・忌避欲求の大きさを示す単なる指標だと言えるだろう。死というモチーフが選択されたのは、前段で示したように軽い気持ちでのことであつたと考えればよい。死欲求の凄

絶さと決然性を①～④へと増していったのは、被害意識と忌避欲求をより増加して表現しようとしたからに他ならない。

ダナイデスの死欲求の真意について三つの観点から見てきたが、その結論に至る前に次のことを確認しておく必要がある。つまり死欲求を語るダナイデスが本当に死を欲しているか否かという問題には、どちらとも判断しえないというのが答えだということである。結果論的に考えると、確かに、上に示した通り、彼女らは808以降二度と死欲求を語らないし、実際に身の危険が迫っても自殺は実行しないから、その時点ではもう死欲求を持っていなかったと判断できる。（たとえそれは神の援けを思いついたからであったとしても、彼女らがそれほどあっさりと放棄することのできた死欲求とは、それほど切実なものではなかったと推定される。）しかしそれは結果を見ないと判断しえないことである。第三スタシモンで死欲求の言葉が語られている時点では、観衆はどちらとも決めてはならないのである。しかし我々は第三スタシモンを無為に見過ごさなくてはならないわけではない。第三スタシモンでは、少なくとも観衆にいくつかの暗示が同時になされているということは確かである。命を安直に手放すダナイデス像、忍耐力が乏しく、不安・恐怖に極端に弱いダナイデス像、自殺を気軽に困惑状態の表現に取り入れてしまう口に慎みのないダナイデス像が暗示されていた。これらの暗示は全て作品が観衆に与えたもので、それらが互いに矛盾を来さない限りは、どれかを選択しなくてはならないものではない。観衆はむしろそのすべてを取り込んでおいて、そのどれかが他の部分と結びついて作品全体の解釈が構築される時を待つべきなのである。

(iv) ダナイデスにとっての神

前節では、ダナイデスが第三スタシモンにおいて神に加護を求めるようになるのと入れ替わりに死欲求の表出をやめるのが観察された。彼女らにとっては、「神による救い」が「死による救い」のオルタナティブ（代替物）になっているわけである。このことは、神の救いという観念が彼女らにとって小さからぬ影響力を持っていることを示している。しかし前章では、嘆願シーンにおける彼女らの不敬・不信仰な言動も観察されている。彼女らの神に対する態度はどのようなものと見ればよいのであろうか。その答えの一端は、第三スタシモンの周辺で不安と恐怖に襲われた状態の彼女らがどういう振る舞いをしているかを調べることによって見出されるであろう。

再びその真意はともかくとして、彼女らが神に対して敬虔さを示す言葉を吐いている箇所を探すと、ゼウス相手の嘆願であるパロドスのほか、アルゴスの繁栄を神々に祈る第二スタシモンの全部分(630-709)、自分たちの幸先のよい将来をゼウスに祈るエクソドスの末尾(1052-73)など、作品中の随所にある。とりわけ、彼女らが敵の伝令使に引き連れられようとする危機的シーンの末尾部分(890-92 = 900-902)において、コンモスの歌として繰り返し「大地(Γῆ)」とゼウスの名を呼ぶことは、彼女らが神を頼りにしていることを思わせる箇所である。

しかし彼女らの神への依頼心はコンスタントなものとは言えない。第三スタシモンに入る直前、ダナオスは彼女らが安心すべき理由を9行にわたって語った上で、

cù δὲ
 φρόνει μὲν ὡς παρβοῦσα μὴ ἀμελεῖν θεῶν 773

「怯えてはいても分別を持って神々を忘れぬように」
 と命じている。しかし第三スタシモンにおいて彼女らが死欲求を表出する最初の4連(776-807)では、神の援けを忘れていたとあってよいだろう⁽⁶¹⁾。特に第三連(β)においては、ゼウスも彼女らを助けてはくれないということを前提にして死を欲しているのである。ではこの不信仰の状態はいつから続いていたものなのか。そもそもこの不信仰は、彼女らがひどい不安と恐怖に襲われているという事実と表裏一体を成すものであるが、彼女らが自分たちの先行きについて懐疑的になったのは、第三エペイソディオンでダナオスから敵船の到来を聞かされた時(710-33)からであった。しかし彼は恐れるべきことだけを語ったのではなく、「この神々を忘れずに」(τῶνδε μὴ ἀμελεῖν θεῶν) 気を確かに持つように(724-25)、「裁断の守りを決して忘れぬように」(ἀλκῆς λαθεῖσθαι τῆσδε μηδαμῶς ποτε 731)、冒涇者には神罰が下ることを信じて元気を出すように(732-33)と、彼女らに対して宗教的勧告も忘れていなかった。それにもかかわらず彼女らは、早くも736-37で自分たちの逃亡してきたことが無駄であったのではないか(πολυδρόμου φυγῆς ὄφελος εἰ τί μοι) と疑う。751-52および755-56では、アイギュプティオイの前では祭壇も三叉の矛も神々の徴も護りとしては機能しないだろうと、覚めたことを言う。このような状態が第三スタシモンへとつながっているのである。

第三スタシモンの後はどうであろうか。第四エペイソディオンへの転換においては理想と現実のギャップが巧みに描かれている。第三スタシモンの5・6

連(808-24)では彼女らの敬虔な祈りの言葉がひたすら神々、特にゼウス(811-24)に向けられていたのに対して、第四エペイソディオン(825-1017)に入ると、危機がいよいよ迫ってくるのに、しばらく神への訴えが聞かれなくなる。確かに祭壇には忘れずすがりついているようではあるが(832, 851)、彼女らの言葉はもっぱら敵の伝令使に2人称で向けられており、880に至るまで神に訴えを向けることはない。880にしても、これは伝令使に「神々を呼べ」(*καλεει θεους* 872)と挑発されたうえで、異国のナイル河神に敵の撃滅を願うというものである。この祭壇がまつているはずのギリシアの神に訴えを向けるのは、伝令使に手をかけられて危機的状況に至ってからである。

これらのことが暗示するのは、彼女らは神を、エジプト人たちの前でも通用する絶対的権能を持って保護を与えてくれる護り手としては、窮地に追い込まれるまでなかなか考えようとはしないということである。そして彼女らにとって祭壇とは、少なくともエジプト人たちの前では、神の絶対的(あるいはそれに準ずる)な保護の及ぶ砦、すなわち神聖な威力を持った守りの砦ではなかったということである。この暗示内容は、彼女らが嘆願シーンにおいて神に対して高慢な態度を取っていたこと⁽⁶²⁾、および祭壇を汚すことに何のためらいも持たないそぶりを見せたこととぴたりと一致する。

(v) この章で得られたダナイデス像

死欲求の描写から得られたダナイデス像は(ⅱ)節の末尾にもまとめたが、それをさらに整理すると、忍耐力が極端に弱く、好都合の可能性を見ると安直に命を手放すことを考え、どこにも遠慮なく自分の欲求を口外する者たちと要約されるであろう。一方、死欲求を表出しないときの彼女らの言動から得られたダナイデス像は、神と祭壇に対する信頼があまり強くなく、父親の宗教的勧告にも従おうとしない娘たちとまとめられるであろう。ここで得られたダナイデス像の中でも、特に、安直に自殺意図を口にするという点と、神と祭壇の権威を見くびったところがあるという点と、ダナオスの分別ある教えに反して行動するという点は、嘆願シーンから得られたダナイデス像とも共通していると言える。

V

ダナイデスと結婚

(i) 統御を要する乙女たち

ここで本稿の最初の課題に戻って考えてみることにしよう。『ヒケティデス』の2大特徴である嘆願シーンと死欲求表出シーンは、結婚またはガモスを肯定することを意図した「ダナイデス」三部作の中でいかに機能していたと考えられるか。Ⅱ章とⅢ章で探り出した、それぞれのシーンが描いていたダナイデス像は、分別に欠け、自分本位に行動し、目的を遂げるためには立場も考えず攻撃的にもなるという、いわば「とんでもない乙女たち」と言い換えることができるであろう⁽⁶³⁾。彼女らは自分たちの主張の正当性を明らかにしようとしないうことは既に述べた(Ⅱ-r)。もし正当な根拠なしにかのように行動をしているのであれば、彼女らは社会の中で統御されなくてはならぬ存在なのである。

(ii) 結婚の忌避(?)の正当性

彼女らが「とんでもない」振る舞いをした原因として確実に言えるのは、彼女らが「アイギュプティオイとの結婚を免れたい」という強い意志を持っていたからだ、ということである。彼女らのその意志の正当性の問題を少し検討してみよう。そもそも彼女らはなぜ「アイギュプティオイとの結婚」を厭うのであろうか。例えば、彼女らが厭うのアイギュプティオイなのか、結婚一般なのか。この問題については、この作品はさまざまな解釈の余地を与えている⁽⁶⁴⁾。「男どもから逃げたいと思って…」(8)、「結婚の臥床を厭い…」(332)および149と1030におけるアルテミスへの言及は、男嫌いまたは男との性的接触に対する一般的嫌悪を予想させる。また「叔父の娘を無理無体にわがものにする」(37-39)および「縁者をφίλουςとして非難する(または買う)」(337)は、いところ同士の近親結婚というものに対する彼女らの一般的嫌悪感を暗示する。これに対して、392, 420-37, 752-63は、アイギュプティオイの暴力的で慎みのない性格に対する彼女らの個人的嫌悪感を暗示する。また「アイギュプティオイ一族に仕える身(δουλῆς)にならぬようにするために」(335)は、父の王権問題における敵としての彼らに対する個人的敵意を示しているともとれる。一方、「掟が禁じる閨を犯し」(37)および「定めめに背く[結婚]を許さないで…」(80)は、彼らとの特定の結婚が(近親結婚だからかその他の理由で)掟に公然

と背くものであることを示唆するのだが、336-37と390-96の問答はその真偽をあいまいにしている。ダナオスの言葉(223-28)はどうか。それは、父親もこの結婚を望んではいないことを明らかに示すが、鷹と鳩の比喻によって表しているのが近親結婚に対する嫌悪なのか、親類内での横暴に対する不満なのかはあいまいである。このように暗示は多彩だが、結局、彼女らがこの結婚を厭う決定的な理由は示されていない。

もし観衆に、彼女らの主張の正当性を判断する手がかりが与えられているとすれば、それは近親結婚の問題であろう。近親結婚については厳しい禁忌を守る文化が多いが、エジプトにおいてはファラオ時代から、王家においては兄弟姉妹婚が確実に行われていたという記録がある⁽⁶⁵⁾。そのようなエジプト人の慣行がギリシア人にも知られていたとすれば、アイギュプティオイには近親結婚を何とも思わぬ「野蛮さ」のイメージがちらついていたかもしれない。しかし、

(日本のように)いとこ婚については寛容である文化が多い。アイスキュロスの時代のアテナイにおいては、兄弟なしの娘が父親を亡くした場合(つまり *ἐπίκληρος* となった場合)、父方の叔父以下血縁の濃い順に親戚の中から結婚相手を選ばねばならないという決まりがあったし、またそういう事情がなくとも親同士の友好の証としていとこ同士が結婚させられる場合があったというのが史実である⁽⁶⁶⁾。そうであるとすれば、アテナイの観衆は単なるいとこ婚が掟に反するものであるとはみなさなかつたのではないだろうか。Thompson

((1967), 307および(1971), 30) は、近親結婚を禁じた「古い秩序」と相続等のために近親結婚を是認し始めた「新しい秩序」の支持者の間に対立があったはずだと主張しているが、仮にそれを認めるとしてもダナイデスの結婚忌避はいっこうに正当化されはしないのである。むしろダナイデスの主張は新体制の中では統制されねばならないものであった。そればかりか、ペラスゴスの「縁者と結婚すれば勢力をいっそう増すことができよう」(338)という言葉は、このような近親結婚が普通は肯定されるべきであるはずだという前提に立った言い方である。また彼の「アイギュプトスの国の掟にもとづき一番濃い血のつながりを理由にあげて…」(387-88)という言葉も、正当性はアイギュプティオイの方にあるという可能性を示唆した言い方である。ただし彼らとしても、結局、所有物を持ち帰ることは正義に悖ることではないと言うだけで(916-33)、「真意にかなうような説明」(*εὐσεβὴς λόγος* 941)を語ることは最後までしない。そもそも話の設定が、アテナイの観衆には知見の乏しいエジプトとアルゴスの話であるし、さらに神話的時代の話であるので、掟が明示されない限り、いと

この婚の問題については誰にも判断がつかないと言わざるを得ない⁽⁶⁷⁾。

この求婚自体の正当性はこの通りあいまいなままであるが、ダナイデスとアイギュプティオイのどちらに分があるかということは、別の要因によって一応の決着が与えられる。つまり、第四エペイソディオンでアイギュプティオイの立場を代表する伝令使が登場して、実際に暴力をはたらき祭壇に対する不敬行為をやってのける。彼らはこのことによって、それまであいまいに保たれていた彼らの全般的な正当性を失ってしまうのである。観衆はここで結婚忌避の正当性をうやむやにしたまま、共感をダナイデスのほうに向けるよう強いられる。劇進行のこのようなやり方は、ちょうどダナイデスが自分たちの正当性をうやむやにしたまま、脅迫的嘆願によってペラスゴスを味方につけたのと全く同じやり方である。アイスキュロスが繰り返しこのように、ダナイデスの結婚忌避の正当性をあいまいなままに残して問おうとしない態度を見せるということは注目すべきことである。彼は観衆をして、この問題を判断せずに劇を眺めるようにしむけているのである。我々は、彼女らのもともとの主張とは別の次元で彼女らの言動を見るように勧められているのである⁽⁶⁸⁾。そこで浮上してくるのがⅢ・Ⅳ章で分析したダナイデス像である。

(iii) ダナイデスの象徴性

アイスキュロスは『ヒケティデス』において、要するに、彼女らに正当性があるかないかの問題はさておいて、ともかくも（ある男たちとの結婚を厭うばかりに）「とんでもない暴れ方をする乙女たち」というイメージを強調して描いていたのであった。ダナイデスの大胆で奇抜な振る舞いは、多分観衆を唾然とさせるものであったろう。しかし、かの振る舞いはかの乙女たちだけの特異性を表すものであると考えてしまってよいであろうか。他の普通の乙女たちには全く関係のない振る舞いであると言えるだろうか⁽⁶⁹⁾。そもそも求婚者を逃れる50人の乙女たちという神話的モチーフからして、特異性を持った個人ではなくて何か普遍的な属性を象徴する集団であることを暗示するものではないか⁽⁷⁰⁾。

この問題を考えるためには、古代ギリシア人にとって結婚が何を意味していたかを知っていなくてはならない。古代ギリシアにおいては、結婚は、女を野性の状態から文明の状態へと「飼い馴らすこと」としてとらえられていた⁽⁷¹⁾。クセノフォン『オイコノミコス』に登場するイスクマコス、当時の普通のギ

リシア人よりも女性のいわゆる「人権」に対して理解があると解される人物であるが、彼は7.10で、自分の妻を結婚後に教育したことを、「手なづけた」(χειροποίητος ἦν)、「飼い馴らした」(ἐτετιθόσεντο)という動物に対して使うのと同じ言葉で言い表している⁽⁷²⁾。また、アテナイでは、処女を代表する「選ばれた少女たち」が、結婚前にブラウロンのアルテミスの神域に長期間こもって、儀礼的に熊を演ずることを義務づけられていた。このことは、結婚という野性から文明への変転を演ずるものであったと解釈されている⁽⁷³⁾。以上のことをふまえると、先のダナイデスの象徴性の問題に一つの答えを出すことが可能となる。つまり、結婚前の女というものは野性に属するものとみなされていたわけである。そして野性に属するということは、「飼いならされていない野生動物のようであること」と「(人間らしくはあっても)アルテミス的であること」の2つを意味したのである⁽⁷⁴⁾。『ヒケティデス』に描かれたダナイデス像は、まさにこの結婚という統御を待つ「野性の女」を象徴しているのである。というのは、まず一方において、彼女たちは分別に欠けており、他人の迷惑をかえりみずしたい放題のことをするという点で、飼い馴らされていない野生の動物と似ているし、また他方において、(その対象がアイギュプティオイだけに限定されるか否かにかかわらず)男たちを嫌悪し、攻撃性を備えているという点で、アルテミス的であると言えるからである。そして彼女たちは結婚を前にしてその野性ぶりを発揮しているのである。「野性の女」を象徴することでは、彼女たちはブラウロンで演じられる熊に少しも劣ることがないであろう。

また、古代ギリシアの文化において結婚とは、特に乙女にとっては、死と極めて近似したもの、構造的にイクウィヴァレント(同等)なものとして位置づけられていたという事実も重要である。結婚式と葬式の儀礼は極めて類似していた。また、結婚前の死をハデスとの結婚として、あるいは、生きていたら下であろう結婚のオルタナティブとして描いた碑文が数多く存在する⁽⁷⁵⁾。結婚は、男性の場合と違い、女性の生涯においては乙女(παρθένος)から妻(γυνή)へと大きく「変わる」ことを意味していたから、それは乙女にとっての(ある種の)「死」を意味するものであったとあってよいであろう。ダナイデスがより純粋に乙女を象徴するものであればあるだけ、彼女らにとって結婚を強いられることは死を強いられることと同等なものとなるのである。それだからこそ、彼女たちはあたかも死ぬ覚悟は既にできているというような言動がいと容易にできたわけであるし、また結婚を避けるために命がけになることもあたりま

えのごとくできたのである。

「ダナイデス」三部作の第三作では、結婚が暴力(*βία*)ではなく欲望(*πόθος*)と説得(*πειθω*)によって成就するものとして肯定される。しかしその結婚というのは「野性の女」を統御することを意味するものであった。アイスキュロスがその第一作において強調して描いたのは、結婚前の統御されていない「野性の女」たちだったのである。

注

第一作『ヒケティデス』と第三作『ダナイデス』（断片）のテキストは、それぞれ、

Page, D., *Aeschyli Tragoediae* (OCT 1972)

Radt, S., *Tragicorum Graecorum Fragmenta*, Vol. 3 (1985)

を使用した。

参照文献は次の通りである。

Blundell, S., *Women in Ancient Greece* (1995)

Burian, P., 'Pelagus and Politics in Aeschylus' Danaid Trilogy', *WS* 8 (1974)

ブルケルト, W., 『ギリシャの神話と儀礼』 (1979) (和訳1985)

Buxton, R., *Persuasion in Greek Tragedy: A Study of Peitho* (1982)

Buxton, R., *Imaginary Greece: The Contexts of Mythology* (1994)

Carson, A., 'Putting Her in Her Place: Woman, Dirt and Desire' in *Before Sexuality: The Construction of Erotic Experience in the Ancient Greek World* (1990)

Dodds, E. R., *The Ancient Concept of Progress and other Essays on Greek Literature and Belief* (1973)

Easterling, P., 'Presentation of Character in Aeschylus', *G&R* 20 (1973)

Forbes Irving, P. M. C., *Metamorphosis in Greek Myths* (1990)

Friis Johansen, H. & Whittle, E. W., *Aeschylus the Suppliants* (1980)

Gantz, T., 'Love and Death in the Suppliants of Aischylos', *Phoenix* 32 (1978)

- Gantz, T., *Early Greek Myth: A Guide to Literary and Artistic Sources* (1993)
- Garvie, A. F., *Aeschylus' Supplikes: Play and Trilogy* (1969)
- Gould, J., 'Hiketeia', *JHS* 93 (1973)
- Hall, E., *Inventing the Barbarian: Greek Self-Definition through Tragedy* (1989)
- van Hooff, A. J. L., *From Autothanasia to Suicide: Self-Killing in Classical Antiquity* (1990)
- How, W. W. & Wells, J. A., *Commentary on Herodotus* (1928)
- Ireland, S., 'The Problem of Motivation in The Supplikes of Aeschylus', *RhM* 117 (1974)
- Just, R., *Women in Athenian Law and Life* (1989)
- Kopperschmidt, J., *Die Hikesie als Dramatische Form: Zur Motivischen Interpretation des Griechischen Dramas* (1967)
- Kopperschmidt, J., 'Die Hikesie als Dramatische Form' in ed. W. Jens, *Die Bauformen der Griechischen Tragödie* (1971)
- 久保田忠利, 「古代ギリシアにおける嘆願について: ギリシア悲劇を中心に」, 『文明研究』 12 (1993)
- Lloyd-Jones, H., 'The Suppliants of Aeschylus' (1964) in *Oxford Readings in Greek Tragedy* (1983)
- Mazon, P., *Eschyle* (Budé 1953)
- Meiselman, K. C., *Incest: A Psychological Study of Causes and Effects with Treatment Recommendations* (1978)
- Mikalson, J. D., *Athenian Popular Religion* (1983)
- Mikalson, J. D., *Honor Thy God: Popular Religion in Greek Tragedy* (1991)
- Murray, G., *The Complete Plays of Aeschylus* (1952)
- 岡道男, 「『ヒケティデス』解説」, (岩波) 『ギリシア悲劇全集』 vol. 2 (1991)
- 岡道男, 『ギリシア悲劇とラテン文学』 (1995)
- Parker, R., *Miasma: Pollution and Purification in Early Greek Religion* (1983)
- Podlecki, A. J., 'Reconstructing an Aeschylean Trilogy', *BICS* 22 (1975)
- Pomeroy, S., *Xenophon Oeconomicus: A Social and Historical Commentary*

(1994)

Rehm, R., *Marriage to Death: The Conflation of Wedding and Funeral Rituals in Greek Tragedy* (1994)

Robertson, D. S., 'The End of The Supplikes Trilogy of Aeschylus', *CR* 38 (1924)

de Romilly, J., *Patience, Mon Coeur!...: L'Essor de la Psychologie dans la Littérature Grecque Classique* (1984)

Schadewaldt, W., 'Die Entscheidung des Achilleus', *Antike* 12(1936) also in Schadewaldt, *Von Homers Welt und Werk* (1965)

桜井万里子, 『古代ギリシアの女たち: アテナイの現実と夢』(1992)

Sinn, U., 'Greek Sanctuaries as Places of Refuge' in ed. N. Marinatos, *Greek Sanctuaries: New Approaches*(1993)

Thompson, G., *Aeschylus and Athens* (1967)

Thompson, G., 'The Suppliants of Aeschylus', *Eirene* 9(1971)

Vidal-Naquet, P., 'Recipes for Greek Adolescence' (1974) in ed. R. L. Gordon, *Myth, Religion & Society* (1981)

Winnington-Ingram, R. P., *Studies in Aeschylus*(1983)

Zeitlin, F., 'The Politics of Eros in the Danaid Trilogy of Aeschylus' (1988) in ed. R. Hexter, *Innovations of Antiquity* (1992)

(1) この作品を取り扱った従来の研究は、『ヒケティデス』という作品を解釈した上で三部作を復元することを意図したもの (Winnington-Ingram, Podlecki, など), 三部作とは離れて『ヒケティデス』に分析を加えたもの (Ireland, Gantz(1978), Kopperschmidt(1967), など) とに分かれる。

(2) ギリシアの嘆願について論じた研究でこの作品に言及するものは多いが, しかし特にこの作品の嘆願について多くを論じた研究というのは数少ない。岡(1995), Kopperschmidt(1967) は数少ない例であるが, 岡は『ヒケティデス』内のイオのモチーフを重視して, 三部作全体をアルゴス王朝の成立物語として見ようとする点で本論とは異なった立場に立つ。Kopperschmidt は嘆願と三部作全体との関係には関心を向けていない。またギリシアの自殺について論じた研究も, 『ヒケティデス』に言及するものは多いが, この作品の自殺モチーフについて2ページ以上を費やした研究は, Garrison (E. P. Garrison, *Groaning Tears: Ethical and Dramatic Aspects of Suicide in Greek Tragedy*(1995)).

これは6ページを充てているが、私はまだ本文を読む機会を得ていない。)を除き、皆無のようである。

(3) cf. Garvie, 164.

(4) Garvieはあげていないが、Winnington-Ingram, 70-71 も、男性と女性と結婚がこの三部作の中心問題であるとしている。アイスキュロスは結婚における女性の地位に威厳を与えたとする点ではThompsonの説に近いといえる。

(4A) この断片の相対的な重要性については、cf. Garvie, 226-33.

(5) cf. S. Blundell, 119-20; 桜井, ch. 2, 64, 125-31.

(6) 普通結婚と訳される *γάμος* という言葉は、同時に性交を意味する言葉でもあった。R. Rehm. 159 n31. を見よ。結婚に対する期待と祝福については、R. Just, 40 を見よ。

(7) Buxton(1982), 87 は、『ヒケティデス』の中でも、ダナイデスがアイギュプティオイ・男性・結婚に対して抱いていた見方が、実は偏ったものであったことが暗示されているということを示している。更に、cf. Gantz(1993), 204.

(8) cf. Buxton(1982), 83.

(9) cf. Winnington-Ingram, 71.

(10) このセリフが、ヒュペルメストラがその姉妹を裁く裁判において語られたものであるか否か、は問題ではない。cf. Garvie, 210.

(11) Cf. Gantz(1993), 205. ダナイデスの個人的事件の象徴性については、cf. Lloyd-Jones(1964), 52 および下注(70)を見よ。

(12) 「オレスティア」三部作が描いていたのは、単にアレオパゴス裁判所の再出発ではない。むしろそのことに象徴されている人類の進歩、すなわち、人類が法的制裁の制度をアテナ女神から与えられたことよっての血の復讐の連鎖を断つようになったという、野蛮状態の克服を描いていたのである。cf. Dodds, 6, 47-50, 62.

(13) cf. Zeitlin. ジェンダーの問題に焦点を当てて、2作の共通点を特に238-40に簡潔にまとめている。「ダナイデス」三部作の上演年代については、岡(1991), 351-52 を見よ。

(14) Robertson, 52とWinnington-Ingram, 71は、この三部作でアイスキュロスは女性の地位に尊厳を与えたのだ、としている。

(15) Burian, 14 は、アイスキュロスがダナイデス伝説の中でも「ダナイデスのアルゴス到着」というドラマ性に乏しい一事件を、ペラスゴスという人物

の創造によってドラマ化し三部作の出発点にした、というが、この第一作で描かれたもの (e. g. 民会モチーフ, ダナイデスの社会的責任意識の低さなど) が三部作にどのように反映されているのかは論じていない。他方, Winnington-Ingram, 71-72; Gantz(1978), 287; Gantz(1993), 204; Buxton(1982), 77らは、『ヒケティデス』においてイオのモチーフが何度も反復されるが、そこにはイオとゼウスの間の性関係についてダナイデスたちが抱いていた認識の間違いが描かれていて、それが彼女たちの先行きを暗示するものであると見ているようである。(この点については, Garvie, 224も見よ。) しかしここに指摘されているのは、三部作を展開する機能ではなくて、あくまでも展開の暗示に過ぎない。

(16) 岡(1995), 200は、第三作でダナイデスの子孫からアルゴス王朝が生まれることが語られるとし、彼女たちの嘆願はアルゴス王朝が成立するために必要な試練のひとつであった、という位置付けをする。しかし私は三部作の中心主題はアルゴス王朝成立とは別のところにあり、ダナイデスの嘆願も別の大きな意味を持っていると考える。

(17) この嘆願が描かれている第1エペイソディオン(176-523)は、ギリシア悲劇のエペイソディオンとしては異常に長い。ここで演ぜられるペラスゴスへの嘆願は270行を越える長大なもので、特定の人物(人間)に援助を乞うタイプの嘆願の描写としてはギリシア悲劇の中で最大のものである。しかし彼女らの嘆願はここで終わるわけではない。ダナイデスが嘆願の小枝を下に置き嘆願の「構え」を解くのは507においてであるが、しかし508のペラスゴスの招きに応じてすぐに祭壇を離れたかどうかはテキストに示されていない。もし祭壇を離れたとしても、彼女らがまだ *λευρὸν ἄλοος*(508), *βέβηλον ἄλοος*(509) にいる以上は、少なくとも、冒頭より行われている 祭壇・神殿に asylum を求めるタイプの嘆願(cf. 1-39) は解除されていないと考えたほうがよさそうである。

(*βέβηλον ἄλοος* を profane grove でなく larger precinct と解すべきことについては, Sinn, 97 を見よ。) 更に, 509, 515 のダナイデスの言葉を見るならば、アイギュプティオイへの恐れが減ぜられたわけではない以上、ダナイデスが祭壇・神域への嘆願者としての地位を放棄するとは考えにくい。

(18) 嘆願についての基本的文献は, Gould; Kopperschmidt(1967)(1971); Parker; Mikalson(1991); Sinn; 久保田; 岡(1995)がある。

(19) α タイプの嘆願はホメロスにおいて例が多い。時には、しぐさを言葉だけで表すことによって行われることもあった。ただしその場合、要求の強制力は弱くなる。cf. Gould, 77. また、 α タイプは古典期においては悲劇などで

演ぜられるのみで、現実の世界ではもう行われなくなっていたようである。

Mikalson(1991), 258 n1; Parker, 182を見よ。

(20) Parker, 181-82 によると、 α タイプの嘆願はホメロスにおいてはヒケティアとは呼ばれておらず、神の保護も与えられなかったし、この保護を拒絶することは禁じられてはいなかった、という。

(21) 「私をあなたの共同体に受け入れてください」という嘆願もBタイプに含まれる。Parker, 181は、ほぼA/Bに相当するものとして spare me supplication/help me supplication という分類法を提示しているが、前者をもっぱらホメロスの例においてしかとらえておらず、A \times α タイプという組合せおよびCタイプについての考慮が不十分である。Mikalson, 71 はAとCを一緒にして「asylumを求める嘆願」としているが、要求を向ける相手を区別することも重要である。

(22) ただし、 α タイプの形式の場合には、神による強制力はなかったようである。cf. 上注(17)。また、Mikalson(1991), 257 n7 も見よ。

(23) Eur. *Hik.*; Soph. *OM*においては、嘆願を受け入れる際に、受け入れた場合の見返りへの期待が大きい。cf. 岡(1995), 229-30。しかしダナイデスの場合には、何の見返りも示されていない。

(24) ダナイデスの物語は神話上の物語であるから、ペラスゴスがいかなる時代のいかなる法と慣習にのっとって行動するべきなのかを議論することは古代アテナイの観衆にとっても不可能であったはずである。ギリシア悲劇において前提とされるのはむしろ人間世界の不変の掟や、書かれざる法であり、それ以外の法や条例は、『アンティゴネ』に見られるように、必要に応じて作品内に示されると考えるべきである。従って、劇の理解のためには、制度についての厳密な知識は必ずしも必要ではないと考えられる。

(25) Mikalson(1991), 71-72, 275 n5.

(26) Hdt. 1. 158-59の例をあげている。

(27) 神域内で自殺する、またはその予告をする嘆願者の罪について述べた文献はなさそうである。しかしダナイデスがかりにいくら責任をペラスゴスに帰そうとも、祭壇を意図的に汚そうとする行為自体に罪が問われないとは考えにくい。

(28) いうまでもなく、古代ギリシアにおいては死というものは汚れであり、聖なるものに近付けてはいけないものとされた。cf. Parker, ch2. Thuk. 134. 2-4 は、たとえ飢餓によって死ぬのであっても、嘆願者を神域内で死なせるこ

との汚れのほうが、嘆願者を力づくで神域から運び出すことの罪よりも恐れられたということを示す例である。嘆願者を殺害しようとする場合でも、神域から連れ出してから殺すことが多かった。e. g. Thuk. 1. 126. 11; 1. 128. 1; 3. 81. 5.

このことは、汚れの問題に関しては背後の事情よりも表面的な事実の方が重視されたということを示す。嘆願者がいったん神域を離れると、神による加護の問題は消滅し、嘆願された者の正義と名誉の問題に切り変わるのだという Mikalson(1991), 73 の主張も、このことと無関係ではないと思われる。

(29) Gould, 94も述べている通り、嘆願の動作の最大の特徴は、自己卑下 (self-abasement) ということである。

(30) またGould, 97-100は、嘆願の儀礼的動作というのは相手の弱点・急所に対する「攻撃」を象徴するものであるが、しかし同時に、自己卑下のしぐさによって攻撃性を取り除かれた動作であると指摘している。元来、儀礼の形式にのっとるということは、そこにどんな行為が続くのか予測を可能にするということであり、そこには相手を安心させるという機能がある。cf. ブルケルト, 74(II-3)。嘆願が儀礼としてのその機能を保持するためには、その儀礼の行動パターンを逸脱しないことが肝要なのである。

(31) *Od.* 22. 333-53のペーミオスの例も、 α タイプが β タイプよりも効果的とされる例である。

(32) 例えば *Od.* におけるペネロペイア(22. 61-65), ラエルテス(15. 353-54), *Il.* におけるペレウス(7. 129-31), プリアモス(24. 224-27) など、ホメロスの作品に描かれる死欲求はほとんどが消極的自殺の形をとる。

(33) 981 は、困窮した嘆願者に通常予期されるものは餓死か投降かであることを示している。

(34) 上注(29)を参照せよ。

(35) Thuk. 3. 81. 3 は、仲間が殺され始めたことを知った時、嘆願者たちが神殿内で実際に自殺したという例を伝えるまれな文献である。この場合の自殺は、絶望による自殺または敵に対する呪いを効果的にするための自殺であったと思われる。少なくとも、相手を説き伏せる手段として自殺したのではないと判断してよいであろう。

(36) ダナイデスはパロドスの21-22 で、自分たちは「嘆願者の羊毛を巻きつけた $\epsilon\gamma\chi\epsilon\iota\rho\acute{\iota}\delta\iota\omicron\varsigma$ なる小枝」($\tau\omicron\iota\acute{\omicron}\sigma\delta' \acute{\iota}\kappa\epsilon\tau\omega\nu \epsilon\gamma\chi\epsilon\iota\rho\acute{\iota}\delta\iota\omicron\iota\varsigma/\epsilon\rho\iota\omicron\sigma\tau\acute{\epsilon}\pi\tau\omicron\iota\omicron\iota \kappa\lambda\acute{\alpha}\delta\omicron\iota\omicron\iota\nu$)を携えて嘆願にやってきたと歌っている。 $\epsilon\gamma\chi\epsilon\iota\rho\acute{\iota}\delta\iota\omicron\varsigma$ というのはここでは「手の内に収まる」という意味の形容詞という形をとっているが、当

時その意味であまり使われた形跡がない。この言葉はむしろ中性形の名詞(*τὸ ἐγχειρίδιον*)として「短刀」という意味で用いられるのが普通であった。そうとすれば、彼女らがここで語る言葉は、「嘆願者の武器なる小枝」という意味をもつのである。彼女らの真意は問えないにしても、この言葉は少なくとも観衆には、彼女らの攻撃性を強く暗示したと言えるであろう。

cf. Friis Johansen & Whittle, ad 21.

(37) OCT では *ὄνοϊτο* としているが、Turnebus は *ὄνοϊτο* とする：「どんな女が親類の男たちを愛しいものとして買う(嫁資を払って結婚する)でしょうか。」また、*φίλους* を Friis Johansen & Whittle は *φιλοῦσ'* とする：「どんな女が親類の男たちを愛していながら非難するでしょうか。」

(38) cf. Friis Johansen & Whittle, 270-75; Buxton (1982), 71-72.

(39) 以下、『ヒケティデス』の訳は、不都合のない限り、ほぼ岡(1991)の訳に従う。

(40) cf. Friis Johansen & Whittle, 293 & ad 387-91.

(41) ペラスゴスは一人で嘆願の受入れを決定する権限を持っていたのかどうか、については様々な議論があるが、決着はつかない。テキストから我々が知りうるのは、アルゴスの政治形態がいかなるものであるかではなく、ペラスゴスが民意を尊重したいという意向を語っているのだということである。

Friis Johansen & Whittle ad 365-69を見よ。cf. Garvie, 150-54.

(42) また、ダナイデスは自分の個人的問題については、合意なしに結婚が押しつけられることに不服を言うのに、アルゴスの政治のあり方については、王が国民の合意なしに政策を決定するべきだと主張する。cf. Buxton (1982), 73.

(43) Burian, 10.

(44) Soph. *OK Eur. Hiket.* におけるテセウスや、*Eur. Hkld.* におけるデモポンにも見られる典型的なホストの描写である。それは嘆願を受け入れるまでのダナオスの小心さの描写に対する埋め合わせともなっている。

(45) 神が忌避するとされる汚れが、特に「自殺」と言う方法によって増大するというようなことはあっただろうか。この点については、死に方により汚れの程度が異なり、自殺は特別の汚れをもたらすものであったという見方 (Parker, 41-42) がある一方で、死人の汚れには死因による区別があまりなされなかったという見方 (van Hooff, 106) もある。ダナイデスの脅迫内容が特に自殺であるということがゼウスの恐れを大きくするものかどうかの判断は困難で

ある。

(46) Mikalson(1991), 76 は、神も嘆願者を「尊重(*σεβω*)」しなくてはならないとされたことを指摘している。また、神がそれを怠ることは「裏切り」という概念で示されたという例を多数あげている。

(47) 上記(ⅳ)にあげた自殺を予告する脅迫的嘆願の例の中で、神に対する嘆願はすべて「消極的自殺」を語っていたということに留意せよ。

(48) 自殺意志を「語る」ということは誓言においてわりと頻繁に行われていたという事実がある。しかし、誓いに語られた自殺は普通、誓いを破った場合の引責・自己処罰として語られるものであって、汚れを意図したり他人を困らせるものとしてではなかった。誓言において語ることが許されたのはそれゆえにこそであったのかもしれない。だから嘆願における自殺意志の表明はこれと同列には扱えない。cf. Mikalson(1983), ch5.

(49) How & Wells, ad loc は、Hdt. 1.159 も同じ考え方を述べたものだと主張している。

(50) ゼウスに対する彼女たちの具体的な依頼事項とは、「敵を沖に押し返す(33-34)」と「自分たちが結婚の軛を免れる(143)」ということである。この嘆願に対してゼウスがどう反応したのかは直接には全く描かれていない。しかし劇の進行を先取りして結果的に見てみると、これらはいずれもかなえられないと考えられる。さらにもちろん、「祭壇にすがる自分たちに敵たちが危害を加えることのないようにしてもらおう」ということが彼女たちの暗黙のしかし最も基本的な期待であったはずだが、伝令使の前ではasylumとしても機能しないように見える(836-910)。彼女たちの嘆願をゼウスは聞き入れたのか否か、判別しがたいものとして描かれていると言うべきであろう。

(51) 175 の後に162-66と同じepithymium が挿入さるようになったのはCanter以降のことである。Friis Johansen & Whittle ad 175 を見よ。

(52) ただしこの指示はスピーチ中の置かれた位置からして、パロドスで行った嘆願を戒めたものであるというよりも、後に展開されるペラスゴスに対する嘆願についての勧告と受け取られる。

(53) そしてまたここには、思慮深い老いた父(176-77)と気が高ぶった若い娘たちのコントラストにも大きい意味がある。

(54) 相手を目の前にして嘆願している場合は、死ぬ覚悟はなくとも、脅迫のためにかのような自殺を予告することは考えうるだろう。(実際には起こることを予期しないことをも付帯条件として言い加えておくということは、「誓

言」を記した多くの碑文に見られるものである。)ただし、彼女らの自殺する覚悟が本気であったか嘘であったかはだれにもわからない。

(55) そもそも劇中の人物になんらかの心、言動の「真意」を想定してよいものなのか、という議論がある。「劇における言葉は人間の内面を表すというよりも人間の置かれた状況を表すものだ」(John Jones)という考え方は‘no psychology’ orthodoxy といわれる。この難解な問題に対する一定の答えはない。しかし最小限言えることは、真意というものが劇中の人物にも存在すると決めてかかるのも存在しないと決めてかかるのも間違いであるということである。もっとも重要な原則は、我々は、作者が観衆に示そうしているもの、有意なものとして描いているものに注目すべきであり、そうでないものには不整合があっても目をつぶるべきであるということである。cf. Easterling. 以下の(ii)節はこの原則に基づいてダナイデスの問題を考えて行く。

(56) この暗示が彼女ら自身の認識にあるのかどうかは誰にもわからない。しかし、アイスキュロスがここに示した暗示は観衆には伝わるのである。

(57) 迷いと決断のこのような単純描写は、ホメロスの心理描写をまねたものと見えるかもしれない。『イリアス』においては英雄たちが何事かを決断する時に、彼は独言でまず、こうしようか、ああしようか、と迷ってみせる。しかしその後すぐに、あたかも、「自分の心は既に決まっていたのに、自分はおろかにもそれを忘れて、場違いな迷いをしていたのだ」と言わんばかりに、

ἀλλὰ τίη μοι ταῦτα φίλος διελέξατο θυμός;

というformulaを語り、続いて決定意思を表明する、という定石をふむ。そこには揺れ動く心理や決断についての説明的描写は一切ない。(Ilias, 11.

404-27; 17. 91-108; 21. 550-70; 22. 90-130; 22. 378-92)cf. Shadewaldt; de

Romilly, 32-33. しかしダナイデスの場合はそれとは少し違う。パロドス、第一エペイソディオオンにおいて既に自己破壊の傾向が十分暗示されているから、観衆は彼女らの安易な死欲求を「ありうるもの」「似つかわしいもの」として見るであろう。また、決心前のこれらの「迷い」の感情はホメロスにおけるごとく数行で言い流されたものではなく、4度も繰り返しながら歌として時間をかけて、念入りに表現されたものなのである。

(58) *πρέσβη*の意味については、使者たち、敬うべき人、老人など、いろいろなものが推定されている。Friis Johansen & Whittle, ad 727 を見よ。

(59) 命を惜しまないということは、自分の名誉がかかわるような場合には立派なこととみなされたが、それ以外の場合には憶病者、あるいは野蛮人のす

ることとみなされた。Pl. *Laws*, 873c; Eur. *Andr.* 261-62. cf. Hall, 213.

(60) 上注(55)を参照せよ。

(61) 第1連(a)において「黒い煙となってゼウスの雲に隣りあいたい」(779-80)というのは、漠然としたあこがれの場所を示してはいるが、ゼウスがなんらかの形で彼女らを助けてくれるという期待を示すものではない。むしろ、ここでゼウスの雲には、煙を見えなくする(*ἀφαντος* 781; *ἀϊσιος* 782)ためのカムフラージュの役割が与えられているに過ぎない。

(62) 上記Ⅲ章vi節を見よ。神に対して高慢な態度をとっていると解される一節はPageのOCT テクストの1031-33 にもある。

μηδ' ὑπ' ἀνάγκας 1031
γάμος ἔλθοι· Κυθερείαι
στρυγερὸν πέλοι τόδ' ἄθλον.

1032 seq. ἔλθοι Scur., Par.: ἔλθει M

Κυθερείαι στρυγερὸν Burges: Κυθερείας' στύγειον M; στύγειον Stephanus
πέλει Guelf.

「この(結婚という)褒美がアフロディテには厭わしいものとなりますように」

しかしこのテキストは写本の読みとは違うものであり、あまり多くの支持者を得ていない。写本の読み(「アフロディテの司る結婚が必然の軌のもとにやってくることはありませんように。…」)では高慢さを表すとはいえない。

(63) Garvie, 214-15 は、彼女らの性格は問題的性格であるとする説をいくつか紹介している。

(64) Garvie, 215-23; Ireland; Friis Johansen & Whittle, 30-37.

(65) Meiselman, 1

(66) Just, 80, 95; 桜井, 68-69, ch5.

(67) cf. 上注(24)を参照せよ。

(68) Lattimore, 17は、ダナイデスが「なぜ結婚から逃避したのか」ということよりも「逃避したのだという事実」の方が大切だ、とごく単純にだが述べている。

(69) Garvie, 214は、ダナイデスの性格を論じた箇所では、彼女らの言動は全女性に普遍的なものを表しているのではないと述べ(ここでは珍しくちゃんとした論証を怠っているが)、またp. 223 では、Thompsonと共に、ダナイデスが

ギリシア文化を代表するものであるという説を否定している。これら2つの主張は正しいと考えられる。しかし、彼女らがいかなるものを象徴しているのもなくて、彼女たちの性格は彼女たち独自のものであると言おうとしているのであれば、説得力はない。

(70) Lloyd-Jones (上注(11)を見よ) はコロスの人数を論じた一説で、50人对50人の衝突は宇宙的原理の衝突を象徴したものであると述べている。

(71) cf. Carson, 143-45, 149, 152.

(72) cf. Pomeroy, 35 & ad 7.10.

(73) cf. Vidal-Naquet, 179; Buxton(1995), 129. 神話においては熊が野性の最たる動物を意味するということについては, cf. Forves Irving, 47, 74-75.

(74) cf. Carson, 144.

(75) cf. Alexiou, 120-22, 155, 234 n59; Rehm, ch1, ch2.